

向陽介護便り

人生の特等席

昨年12月、アジアを中心に作家性の強い作品を集めた映画祭「第13回東京フィルメックス」で、「老い」を題材にした2作品が受賞しました。最優秀作品は、イスラエルの若手（32才）が監督した「エピローグ」（テルアビブでの老夫婦のつましい一日を描いた作品）、次席の審査員特別賞には、中国の若手（34才）監督による「記憶が私を見る」（監督自ら主演を務め、久しぶりに再会した両親や親戚との何げない会話シーンを撮った作品）が選ばれたとのこと。これを報じた新聞は、続けて「30代の二人がなぜ『老い』なのか」と投げかけ、「なぜ時間が流れ、人の命に終わりが来るのかを問いたかった」と監督の言葉を紹介した上で、世界各地で高齢化が進み『老い』は若い監督らを引き付ける主題になりつつあると結んでいます。

『老い』に関心を持ったのは若い監督だけではありません。昨年封切られたアメリカ映画「人生の特等席（原題：Trouble with the Curve）」では、『老い』というテーマに、82歳のクリント・イーストウッドが真正面から向かい合っています。この映画には、82年を生き抜いてきた彼だからこそ、また今この時だから伝えられる人生の景色があるように思います。

マカロニウエスタン（荒野の用心棒、夕陽のガンマン）に始まり、ダーティハリーマディソン郡の橋、目撃、ミリオンダラー・ベイビー、グラン・トリノ…。俳優であり、映画監督であり、ある時は政治家（市長）でもあるクリント・イーストウッド。

「人生の特等席」の中のイーストウッド観た時、思わず「なんと老けたのだろう」と思いましたが、彼自身の人生をまさに投影したかのような演技で見せるひとりの男の人生、風景が胸に染み入りました。

彼が演じた老スカウトマン、視力が衰え（映画の中では黄斑変性症、緑内障の疑いと診断される）ていく中、長年の経験を元にバットスウィングの風を切る音を

頼りに結論を導き出していく……。

国民栄誉賞の受賞が決まった長嶋監督と松井秀樹選手。長嶋監督は松井秀樹選手を指導した時、バッドスウィングが引き起こす風の音で指導されたそうです。

「ビュッ！！」という音であればOK、スウィングが波打つと「ビュ〜ン」の音になったそうです。天賦の才と弛まざる努力、プラス経験のなせる技ではないかと感じます。（老いは経験の結晶では）

『いい脚本でいい役に出会うと、演じてみようと思う。"歳を重ねること"は、ポジティブなものだと示したいんだ。』（クリント・イーストウッド）



クリント・イーストウッド
ストーリー：メジャーリーグ最高のスカウトマンといわれたガス（クリント・イーストウッド）は今や老いぼれの烙印を押されようとしていた。ハイテクに背を向け、自分のやり方を貫くガス。今年の目玉と目される天才スラッガーの実力を見極めるべく最後のスカウトの旅に。しかし、衰え始めた視力、そんな窮状を知り、長年反発しあっていた一人娘が旅に同行。そして、父娘が天才スラッガーに下した結論が、"カーブに難あり"……。

